

7607<sup>4</sup>

地球電磁気・地球惑星圏学会  
 SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,  
 PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第138号 会報 1993年1月20日

目次

	頁		頁
1. 第17期学会役員選挙結果	1	8. 春の学会合同シンポジウムのご案内	7-8
2. 第92回総会・講演会報告	2	9. ISY協賛 宇宙環境シンポジウム	8
3. 会長挨拶 (第92回総会)	2	10. 人事公募	8
4. 第168回運営委員会報告	3	11. 京都大学超高層電波研究センター電算機 共同利用申請について	8-9
5. 石川晴治先生の御逝去を悼む	3-4	12. 第24回国際電波科学連合 (URSI) 総会の御案内	9
6. 国際学術交流事業補助金受領者の報告	4-5		
7. 本学会創立当初の思い出 (太田征次郎会員)	5-7		

1. 第17期学会役員選挙結果

平成4年12月に行なわれた選挙の結果、第17期 (1993-1994年度) 地球電磁気・地球惑星圏学会役員は下記の方々に決まりました。(総投票数149票)

		票	運営委員 (14名)		票
会長	大家寛 (東北大理)	64	山本達人 (宇宙研)		109
(次点	國分征 (東大理)	22)	三浦彰 (東大理)		107
評議員 (10名)			田中高史 (通総研)		106
	松浦延夫 (名大太地環研)	108	大志万直人 (京大防災研)		105
	國分征 (東大理)	107	兵頭正幸 (神戸大理)		105
	恩藤忠典 (通総研)	106	湯元清文 (名大太地環研)		104
	山越和雄 (東大宇宙線研)	101	小島正宜 (名大太地環研)		98
	河野長 (東工大理)	70	渋谷秀敏 (阪府大総合科学)		94
	木村磐根 (京大工)	63	寺沢敏夫 (東大理)		56
	行武毅 (東大地震研)	59	深尾昌一郎 (京大超高層)		52
	平澤威男 (極地研)	50	森岡昭 (東北大理)		47
	小嶋稔 (阪大理)	41	浜野洋三 (東大理)		45
	西田篤弘 (宇宙研)		鳥居雅之 (京大理)		40
	(次点: 広岡公夫 (富山大理)	38)	乙藤洋一郎 (神戸大理)		34
			(次点: 町田忍 (京大理)		33)

なお、会報137号の選挙広報中に掲載された、「今回は立候補者数が定数に達していませんので、会員名簿を参照の上、地域、分野、機関等のバランスを配慮した新規役員の選出をお願い致します。」の文は、立候補は投票の際の参考資料であるとする内規と矛盾しますので取り消します。(同様の文は会報130号にも掲載されていますが、これも内規と矛盾しますので取り消します)。

## 2. 第92回総会・講演会報告

秋も一段と深まった、平成4年10月20(火)より22日(木)の3日間にわたり、本学会第92回総会・講演会が東京の板橋区立産文ホールにて盛大に行われた。今回は特にポスターセッションに力をいれたが、通常の口頭発表さらに特別講演をお願いした米国スタンフォード大学カーペンター教授、極地研究所寒冷生物学部門の内藤靖彦教授から最新の専門分野での研究成果や興味深い話をうかがう事ができた。また、国際学術交流・海外研究者の招聘事業で初めてAhn博士を韓国よりお招きする事ができた。会場のお世話をいただいた国立極地研究所の皆さんのおかげ熱気に溢れ充実した3日間を過ごす事ができた。

総会は、極地研究所・小野会員の開会の辞によって始まり、議長の指名を受けた乙藤運営委員によって議事の進行がはかられた。極地研究所の平澤教授より大会委員長の挨拶があり、西田会長から長谷川記念杯の授与が柿沼隆清会員に対して行われた。さらに、会長から挨拶をいただき、引き続いて、町田運営委員から庶務報告ならびに役員選挙に関して説明、長野運営委員から学会員名簿作成経過の報告、福西JGG編集委員よりJGG編集委員会の報告が行われた。議事として、JGGの将来像について意見が取り交わされ、次期講演会の準備状況が本蔵運営委員から説明された。次々期開催地に関して前沢運営委員から神戸大学でという提案があり快諾された。大家評議員から謝辞をいただき、乙藤運営委員の開会の辞によって締めくくられた。

### 第92回地球電磁気・地球惑星圏学会総会式次第

一、開会の辞	学会員名簿作成経過報告
一、総会議長指名	一、JGG編集委員会報告
一、大会委員長挨拶	一、議事
一、長谷川記念杯授与	JGG誌の将来像について
一、会長挨拶	次期開催地、次々期開催地
一、運営委員会報告	その他
庶務報告	一、謝辞
役員選挙に関して	一、閉会の辞

## 3. 会長挨拶(第92回総会)

西田篤弘

今回の学会でも多数の優れた研究成果が発表されています。ポスターセッションでは発表者と聴衆の間で活発な議論が展開されていました。これを見ると、地球電磁気・地球惑星圏学会は「生きた」学会であるということを実感します。毎年、新しい会員が加入され、ポスターセッションに集まった会員の多くは20~30代の人達でした。地球電磁気・地球惑星圏の研究を発展させてゆく研究者が着実に育っているのは、たいへんうれしい事です。

そこで若い方々にお願いしたいのは、研究成果をきちんと論文にまとめながら前進してゆくことです。どんなに立派な成果をあげても、学会で発表するだけでは、成果を知る人の数は僅かにしかありません。それではせっかくの成果が学問の発展の礎として生かされないことになります。我々は、研究の歴史の流れの中に生きています。過去の研究成果の上に自分の業績を積み上げ、それが将来の研究に生かされることによって、歴史の中での役割を果たすのです。この役割をきちんと果たすためには、各自の研究成果を論文の形で発表して、学会の共有の知識とすることが必要です。私は数年来、田中館賞の審査に参加していますが、判断の材料として渡される論文を見て物足りない気持ちになることがしばしばあります。私の知る候補者の実力や業績に比べて発表された論文が質、量ともに、不つりあいだからです。

見識が深く、業績の高い候補者について、発表された論文からはその実力を十分にうかがうことが出来ないというのは、まことに残念なことです。日頃から接触のある国内の研究者にはご当人の力量を正当に評価できるでしょうが、外国の研究者からは、論文で判断出来るだけのものしか見えません。これはご本人だけでなく、当学会にとっても損失であると思います。

本日の総会では、JGGの将来が議論になっていますが、学会誌のあり方の基礎にあるのは、学会員が論文を書くことです。この点で、現状は決して満足とは言えません。講演数に比べて、レフェリーのある雑誌に発表された論文の数が異常に少ないと言うべきでしょう。若い会員の方々が、毎年少なくとも1編の論文を書くことを研究生活の必須の要素として習慣づけて行かれることを、望んでやみません。

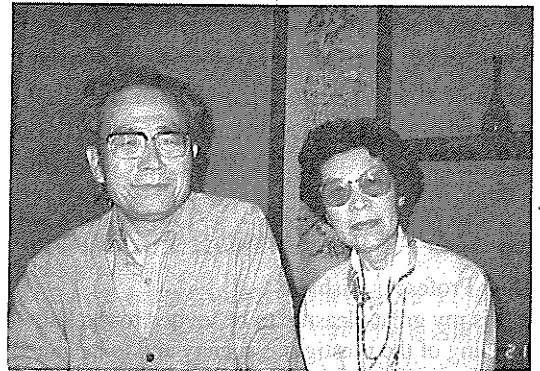
#### 4. 第168回運営委員会報告 (平成4年10月19日於極地研究所)

- 第3回 Western Pacific Geophysical Meeting (WPGM) および宇宙環境シンポジウムに協賛する事が決議された。
  - 学会名簿作成に関して、今回、新方式を採用し、賛助会員の宣伝広告を無料で掲載した。また、賛助会員に国際交流事業派遣者の帰朝報告を送付する事にした。
  - 次期役員選挙に関する日程および手続きの最終確認が行われた。
  - 第92回総会・講演会の準備状況確認と打ち合せを行った。
  - (春季学会)地球惑星科学関連学会合同大会に関する打ち合せを行った。特に、共通セッション・シンポジウムを重視する事が確認された。
  - 新入会員：第168回運営委員会において、次の方々の入会が承認されました。
- |          |          |       |                 |
|----------|----------|-------|-----------------|
| 正会員      | 913-1578 | 宮原 三郎 | 九州大学理学部地球惑星科学科  |
|          | 613-1580 | 草野 完也 | 広島大学理学部物性学科     |
| 正会員 (学生) | 613-1579 | 八木谷 聡 | 金沢大学工学部電気・情報工学科 |

#### 5. 石川晴治先生の御逝去を悼む

近藤豊 (名古屋大学太陽地球環境研究所)

石川晴治先生は去る、平成4年11月6日、脳梗塞のため入院先の病院で亡くられました。享年77才でした。先生は昭和16年東京帝国大学理学部物理学科を卒業、同年4月より商工省機械試験所に勤務されました。昭和26年に名古屋大学空電研究所に助教として赴任、昭和37年に同教授に就任され、昭和54年に退官されました。この間、大気物理学の研究と後進の教育及び研究指導をされる一方、昭和43年から46年まで、昭和48年から50年まで二期にわたり名古屋大学空電研究所長として、更に昭和44年から46年まで、昭和48年から50年まで二期にわたり名古屋大学評議員として大学運営に参画し、大学行政上多くの貢献をされるとともに同大学空電研究所の発展に寄与されました。学外では先生は昭和43年から60年まで日本学術会議地球物理研究連絡委員会附置の大気電気小委員会の委員長



自宅でくつろぐ石川御夫妻

を、また日本学術会議電波科学研究連絡委員会委員を昭和44年から60年まで務められました。これらの業績、各界への貢献に対し、昭和62年に勲2等瑞宝賞を授与されました。

先生の学術研究上主要な業績は、大気物理学の分野のうち、特に大気中の電氣的な諸特性に関するものです。空電研究所での最初の約16年間の研究は雷放電機構の解明が中心的課題でした。具体的には、活動的な大気電気現象の代表である雷放電を研究するために、新に独創的な回転レンズ式および回転反射式の雷光解析用写真機を開発製作し、これを使用して極めて短時間で進行する雷電光の様相を写真記録する事に成功されました。同時に、雷光に伴って発生する電磁界擾乱を直流からメガヘルツ帯にいたる広い周波数成分を多年にわたり北関東地域で観測することにより、日本のような湿度が高く雲底の低い雷雲においても北アメリカの乾燥地帯における雷放電と同様に、対地放電が階段状先駆をもって開始することを初めて実証されました。更に、空電の発生源としての雷放電機構を対地放電、雲内放電の各段階にわたって解明することに成功。この業績により昭和32年日本地球電磁気学会より田中館賞を授与されました。これらの研究は昭和26年から昭和42年にわたって42編の論文に報告され、国外からも注目されました。これらの研究は、雷に伴う災害対策上基本的な資料となり、送配電線系統の耐雷設計あるいは空電雑音の通信妨害の軽減など実用面にも広く応用されています。

昭和40年代に入り大気環境が社会的にも重要な問題となり、先生の研究は静的な大気電気特性と微粒子汚染との関係を追及することに発展しました。長期地上観測、船舶を利用した太平洋域の調査、更には、航空機、気球、小型ロケットを使った地上80km高度にまで及ぶ広範な観測を実施し、汚染物質の広域分布を明かにしま

した。このような分布は汚染物質の発生、除去、消滅のバランスで決っており、除去機構の解明に大きな意義を持つものでした。また、国際共同研究にも大きな関心を持たれ、西ドイツ、スウェーデン、アメリカなどとの共同研究を実現し、全地球的規模での汚染物質拡散の実態を測定されました。

私が先生の下で研究生活を送ったのはわずか3年余りの短い期間でした。しかしその間先生は「研究を続けていく上で大切なことは追及したいテーマを自ら発見すること、与えられたテーマを言われた通りやっているだけではない、また指導する立場のものは安易にテーマを与えたりそれを押し付けてはいけない。」と口癖のようにおっしゃっていらっしゃいました。当時新しい研究に取り組む必要のあった当時の私にとってこのような自由で寛大な態度は何にも増して有難いものでした。そのような環境であればこそ、何が重要であるのか、またどのような問題に焦点を絞って研究をすべきかということを常に考える訓練を自ら積むことができたのではないかと思います。また着任後まもなく新しい観測や実験を自らの責任で試行錯誤的に始めたときは、その多くが失敗か、失敗でないにしろたいした成果がでるものではありませんでした。この試行錯誤の経験が実際に生きてくるのはかなり後になってからのことですが、当時先生は小言をいわず辛抱され私にそのまま研究を続けさせてくださいました。

また先生は進取の気性に富んだ方で、常に世界に広く目を向け、異なった伝統、文化の中で培った精神と出会い、刺激を受け合うことを奨励されました。特に受けた刺激を最大限に生かせるだけの柔軟性のある若いうちに海外へ出ることの大切さを説かれておいででした。このようなお考えの先生の御尽力により、私は20代のうちに西ドイツフンボルト財団の招きによりそこで1年半余りの研究生活を送ることができました。ここでの研究生活で得た知的刺激、経験、友人は今でも私の宝です。

先生はその温厚な笑顔が特徴的で多くの人の印象に残っています。外国の研究者からも石川教授はLovely personであると言われたことがあり、なるほどこのような英語の表現がよくあてはまると思ったことがあります。もはやこのような先生の笑顔にお目にかかることは出来なくなりましたが、先生が研究された空の上から我々の進む新しい道を見守って下さるようお願い申し上げます。

## 6. 国際学術交流事業補助金受領者の報告 (その1)

Byung-Ho Ahn (韓国)

Dear Professor Nishida:

It is my great pleasure to be invited to the Fall meeting of the prestigious society and to have a chance to present a talk. I would like to express my great gratitude to those people including yourself who made my trip to Japan possible. During the meeting I had a valuable chance to meet many Japanese scientists in the area of ionospheric and magnetospheric physics, exchanging scientific ideas with them. I am pretty sure that it would be a wonderful experience for me to enhance research activities in years to come not only in my group but also Korean space physics community. Also the

point I do not want to miss mentioning is the friendship which I have shared with Japanese friends.

I hope this program initiated recently by your society, with which foreign scientists can visit Japan, will contribute in promoting mutual understanding of space scientists in the other part of the world. Thank again for your invitation. I have enjoyed this meeting very much.

With best regards.  
Sincerely yours,

Byung-Ho Ahn

## 6. 国際学術交流事業補助金受領者の報告 (その2) 中川朋子 (東北工業大学通信工学科)

国際交流事業から旅費の補助をいただき、8月17日から22日にかけて香港で行われたWestern Pacific Geophysics Meetingに参加させていただきました。この会議は、開催地香港からの参加者が多いのはもちろんですが、台湾からの参加が多かったのが特徴だったように思います。初日のセッションにおいて、近代の宇宙科学が始まる以前の歴史的な地球電磁気研究史の講演があり、地球から3本くらいしか磁力線の生えていない図(実測!)が出てきたりして、無意識のうちにも「はじめにロケットありき」という気分でいた私にはとても興味深く思われました。セッションはその後「日本の宇宙計画」「台湾の宇宙計画」と続き、宇宙科学の昨日・今日・明日となるよう構成されていました。この配置にも示されるように日本は今(決して新人ではなく)中堅の立場にあり、現在の活躍が期待されていると感じました。私は「あけぼの」電場観測にもとづき、惑星間空間磁場

がX成分しか持たないときの磁気圏状態について発表しました。必ずしも決定的な結論のある話ではなかったにもかかわらず関心は高く、内容のある質疑ができて「誰某にはコメントさせよう」の狙い通り(?)となりました。「他の観測器のデータも用いて磁気圏構造に対する衛星の位置を明確にすべし」というコメントが出ましたが、これは「あけぼの」のような多機能衛星の特徴を活かす道でもあると思います。

他の発表ではESA/NASA打ち上げのUlyssesによる木星最接近の報告が最もエキサイティングでした。パウシヨック・マグネトポーズ・マグネトディスクのみならずカスプも観測されたということで、Voyagerとは異なる軌道からみた木星の情報は関係方面の研究を進める上で大きな力となりそうです。地球磁気圏に関しては、外的要因に対する磁気圏応答のモデリングの研究から、ある磁気圏エネルギーに対して複数の磁気圏状態が有り得るというアイデアが出てきており、今後の可能性を感じました。



中川会員近影

日本からの参加者はわりあい同世代の人が多かったように思いますが、その講演に対して質問やコメントも多く出て全般的に評価は高かったのではないかと思います。それでも会議全体を通じて何となく日本の影の薄さを感じられたのは、セッションにもよると思いますが、議論に日本の研究者が加わることが少なかったためかもしれません。前の方で行われる議論を黙って見物しているだけという状態のこともありました。日本の成果が引用されることもまだあまり多くないようで、論文と講演の二段攻撃をさらに強力に進める必要があるように思います。

この若手派遣援助は、意義においても申込手続きの簡潔な点においても本学会の誇れる制度だと思います。若手とくに大学院生の方には、まだ自分には関係ないなどとは決して思わず、応募者数の少ない今のうちに活用され、国際会議で活躍されることをお勧めします。

## 7. 本学会創立当初の思い出

太田 柁次郎

### 1. 幻の著書「地球磁気及び電気」と戦時研究

1940年頃本学会の「ニュークレアス」とも思わせる標記の名の専門書発行の企画があった。それによると、初代委員長の長谷川万吉先生が自ら編集者となり、田中館愛橘先生に監修をお願いし、当時新進気鋭の先生方に執筆を依頼して、何回かの会合が開かれ、その会合を地球電磁気研究会と仮に名づけられていた。当時、S. Chapman & J. BartelsのGEOMAGNETISMが発売され、新参者の筆者らには地球磁気学に関するマニュアルとしては、十分であったが、地磁気に関連する分野を含めた広い範囲の地球電磁気学の専門書の実現を心待ちにしておった。不幸にも1941年12月太平洋戦争に突入し、外国からの学術的情報が入手できず、好むと好まざるに抱らず逐次戦時研究に傾注せざるを得なくなり、前述の幻の著書は廃案となってしまった。しかし、その組織は戦時中の共同研究の礎となり、戦後の復興に大きく貢献するのである。

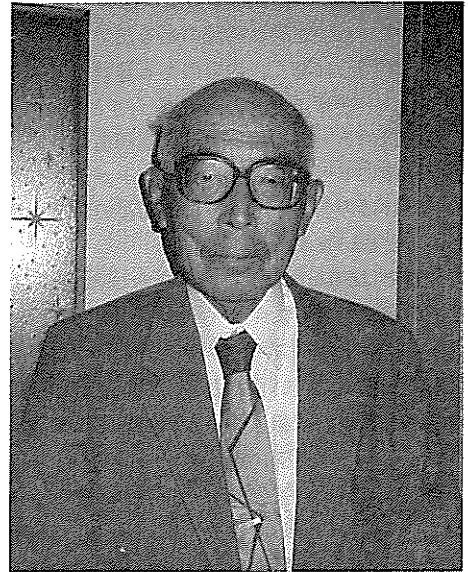
筆者は戦時中（1943年頃）京大講師の身分で指導教授の長谷川万吉先生の研究方針に影響され、得意とするジャンル（観測法、資料処理法などのほか旅行という趣味も含めて）を仕事上に反映することができた。このときの成果が認められて、戦後、研究室の運営の一部をはじめ、学会委員長の代行としての大役を与えられ、職階の割合に多くの仕事を委され、また自分もそれに応えたと今でも思っている。

戦時中、長谷川先生から常に注意されておったコトバの一つに、「戦時研究はともかく、平和産業も忘れない

ように」とのことがあった。当時の筆者にとっては戦時研究とは航空磁気測量、船体磁気、磁気機雷の掃海法、地中電流の利用法などで、平和産業とは磁気機の開発、火山の帯磁、地磁気変化の資料処理などと考えていた。後年、阿蘇火山の帯磁状況に活路を見いだしたのは船体磁気の結果（一様に磁化された回転楕円体の外部磁場の計算）を利用したからであり、また別府市における観海寺断層が強い電気伝導度を持っていることを見いだしたのも戦時中の地中電流の応用である（未公表）。

## 2. 日本地球電気磁気学会の創立とそれに関する組織

1945年8月太平洋戦争は終り、平和がよみがえってきた。われわれの研究グループの復活第一号は、その翌春（1946）発足した故萩原雄祐先生を長とする学術研究会議電離層特別研究委員会（略称：電離層委員会、後のJSC、電離層研連委、今のSTE研究連絡会）である。この組織の指導的立場になられた方々は前記の幻の著書の執筆予定者のほか、太陽物理学、宇宙線物理学、電気通信工学の専門家であり、1910年前後に生まれた



太田会員近影

方々であった。毎月一回東京上野の学士院に集り（当時の学研、後のJSCは1970年頃青山に移るまで、上野の学士院に居候をしていた）、この会合では資料の分析と電離層に関する学際科学の情報と基礎の学問を勉強しておった。

さて、この電離層委は所属としては国立のものであるから、民間組織としての学会の創立をとの声が高まり、翌1947年5月学会の創立総会を開くことになる。この準備のため、準備委員数名（この呼称は筆者がいつつけた仮称である）が、東大永田研究室に集り、総会の日程と議案などを決めた。この準備委員こそは初頭に書いた「幻の著書」の執筆予定者であり、また上記電離層委の指導者でもあり、後年本会の委員長となり、その時代の趨勢に応じた指導的地位に立たされることになる。さて、この準備委で決められたことは総会に提出する規約の原案と講演会のプログラミングで、いずれも始めての仕事と準備期間の少なかったために、開会早々主催者側がまごつくことになる。

1947年5月12日（火）東京地方雨； 会場：東京帝国大学（当時の名称）医学部講堂、議長には宮部直巳さんをお願いした。この方は東大震研、地理調査所（今の国土地理院）を歴任のあと名古屋大学教授に赴任された方で専門は測地学。提出された規約案のなかに役員の項があり、「委員として定員50名とし会員の互選とする。委員長は長谷川万吉先生とする。実務に従事する若干名の幹事として、永田武さん、前田憲一さん、田村雄一さん、および太田権次郎の4名がこれに当る」という内容があった。原文にはないが委員とは年2回開かれる大会毎に出席し、常に論文を提出し、学会の発展に協力する学徒を指している。総会が始って規約の審議にはいと議論百出し、主催者側は答弁に四苦八苦する。質問者側も答弁者側も顔見知りの間柄ではあったが中途半端な妥協や先送りは許されない。幸いにも宮部議長の手際のよい議事はこびで総会は無事終った。しかし、筆者はこの時主催者側に立ち民主主義の下での会議運営のむづかしさを味った。創立総会で最もポテンシャルを上げたのはその夜の懇親会であった。会場として東大地球物理学教室の講義室が開放された。当時の建物は木造二階建てで外観はお粗末なものであったが、ホスト側の研究室各位の歓迎振りは至れり尽せり、エチルアルコールを紅茶で割った研究室で自慢のカクテルを無制限に放出されて、全員が久し振りに酔いつぶれ、大声を出す者、ホーキを持って踊る者、頭を深くさげて挨拶する者、初対面同志でも旧知己のように騒いでおった。こうして長谷川委員長が「懇親会は学会のメインイベントとなり」と言われておった行事が始まったのである。

## 3 初期の地方での学会のいろいろと「三大事業」

1947年の秋は委員長の膝元の京都で開かれた。京都在住の筆者でさえ思ひ出があまり残っておらない程出席会員も少く、盛り上らなかつた。戦後二年目ではあるが、交通事情悪く京都・東京間を直通する列車は夜行二

往復と昼間一往復しかなく、更に大都会での食糧事情も悪く、先ず旅行ということは不可能といってもよかった。筆者が東京に出張する時にはリュックサックに食料を入れて、時には立ち通しで東京まで行ったことさえあった。

このような時代にあって我々に明るさと呼び起こし希望を与えてくれたのが1948年6月の柿岡学会である。当時の今道所長以下全所員だけでなく、町を挙げての歓迎を受けたのである。旧い会員は御承知と思うが、筆者としての思い出を少し書いてみよう。先ず三食とも研究所構内（町の人々は地磁気観測所をこう呼んでいた）で全員に支給され、宿泊には民家での分宿の待遇を受けた。夕食のあと、西の空、筑波山に沈みつつある太陽を眺めながらの懇親会では、夜の更けゆくのも知らず自然発生的に合唱会となり、煌々とつけられた屋外灯の下での音楽の会はエキゾチックの感じのする雰囲気であった。これに加えてこの学会で特筆すべきことがある。それは我が国地球物理学のパイオニアである田中館愛橋先生をお迎えできたことである。

このあと、田中館賞授賞内規を定め次回から始めた。また、翌1949年には学会誌の発行を始め、その名称をJ.G.G. (full nameも今と同じ)とした。当初計画しておいた年4回の発行は逐次困難になってきた。その理由は投稿規定の不十分にもあったが、一つには論文の投稿が少く、更に印刷事情も悪く、悪い条件が重なり巻号と実際の発行の年月とが一致せず、一時は年2回という苦境に立ったこともあった。

とに角1949年になって学会初期の三大事業（総会と講演会の開催、田中館賞の授賞および学会誌の発行）が一応定着することとなった。けれども、交通事情は未だ好転せず、ある時長谷川委員長と共に夜行列車で上京した。普通の座席を確保できず、車掌室のかたい腰掛けで一夜を明かした。東京駅に着く頃先生は急に腹痛を訴えられ、やむを得ず八重洲口近くにある先生の知人の会社で休憩させてもらった。この先生の急病は虫垂炎だったらしく、後日京都の病院で開腹手術を受けておられた。当時筆者は40才になったばかりで、体力に自信がありすぎたが、先生は50才代の後半ですでに老境にあり、いかに苦しかったかは今の自分の体力をノーマライズするとよくわかる。

#### 4. 田中館先生を迎えに岩手県に行く。

1950年秋、仙台で大会が開かれた。委員長の代理で、夏を郷里で過ごされた田中館先生を迎えに、東北大学教授加藤愛雄さんと2人で岩手県福岡町（今の二戸市）に向った。いかに旅行馴れの筆者でも京都から岩手県の北の端までは遠い。幸いにも上野からは当時営業を始めたばかりの特別2等車（今のリクライニングシートのグリーン車）を利用できた。真夜中0時に仙台駅で、加藤さんと出会い一路北上した。福岡町では田中館先生の客ということで大歓迎を受け、講演をせなければならぬことになった。加藤さんはあらかじめ用意されており、当時地磁気変化の最先端であるフレヤー現象をわかり易く話されたが、筆者は全く準備がなかったから、鉄道の話をややむつかしく、例えば「日本の鉄道はなぜ狭軌なのか」とか「運賃と料金のちがいがい」などを話した。その夜は先生の御自宅に泊めていただき、加藤さんと3人が一つ蚊帳で寝させてもらった。

#### 5. その後1970年までのあらし

1952年5月21日、田中館先生は東京のご自宅で2週間のご病臥のあと逝去された。御年満95歳。葬儀は無宗教で東大安田講堂で挙行政され、有名教授のお申いの辞があった。

1960年本会規約の改定をするまでの十数年間長谷川先生の委員長と創設時の主な役員の任期は続いてきた。この頃、委員長をはじめ役員の身分が変わった時期でもあるが、創立時の体制を変更すべき時期にきておったのかもしれない。

1970年7月14日長谷川名誉委員長 約2ケ年の闘病生活の後逝去。時に満76歳。病名は肺性心。けれど、先生は学生の頃肺結核のため約2ケ年休学されており、その後遺症かもしれない。

## 8. 春の学会合同シンポジウムのご案内

春の合同学会第3日目、3月21日（日）に合同シンポジウム「地球・惑星・太陽・宇宙における電磁流体のダイナミクス」を企画しました。共催学会はSGEPSS、地震学会、惑星科学会、天文学会です。

講演タイトル、講演者：（2～7はいずれも講演30分、質疑5分の予定）

- |                                      |                       |
|--------------------------------------|-----------------------|
| 1. 開会の挨拶                             | コンビナー（寺沢敏夫、柴田一成、本蔵義守） |
| 2. 地球・惑星ダイナモ                         | 松島政貴（東工大理地球惑星）        |
| 3. 電磁流体乱流理論からの示唆: Cross Helicityダイナモ | 吉澤徹（東大生産技研）           |

4. 磁力線再結合と地球・惑星磁気圏ダイナミクス
5. 金星・火星と太陽風の相互作用
6. 銀河・星間空間における電磁流体现象
7. 太陽における電磁流体现象 (Yohkohの結果から)
8. まとめ

- 前沢潤 (名大理物理)  
丸橋克英 (通信総合研)  
花輪知幸 (名大理物理)  
常田佐久 (東大理天文教育センター)  
コンピーナー

## 9. I S Y協賛 宇宙環境シンポジウム—— 太陽環境問題を考える —— part 2

宇宙活動が活発化している現在、有人宇宙活動や、人工衛星に対して大きな損害を与える可能性があるスペースデブリ (宇宙のゴミ) 及び太陽からの放射線等の宇宙環境についての関心が高まっております。そこで、国内外の研究状況、今後の対策、技術開発等に関するシンポジウムを開催します。平成4年4月には、part1として、宇宙のゴミ問題に焦点をあて、各分野の専門家の方々より御講演いただきました。今回は、part2として、太陽環境に関するシンポジウムを開催致します。

1. 日時 平成5年2月10日 (水) 10:00~16:25
2. 場所 ダイヤモンドホール (TEL03-3504-6433)  
〒100東京都千代田区霞ヶ関1-4-2ダイヤモンドビル10F

3. 主催 郵政省、財団法人 郵政国際協会電気通信政策総合研究所

協賛 日本 I S Y協議会、電子情報通信学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、日本宇宙航空環境医学会、日本宇宙生物科学会、日本天文学会

4. 参加費 無料 (氏名、職業を明記のうえ、郵便または F A Xにて事務局にお申し込みください。

5. 事務局: 財団法人 郵政国際協会電気通信政策総合研究所企画部  
〒135東京都江東区木場2-8-3 C N 2ビル  
T E L 0 3 - 5 2 4 5 - 3 6 0 0  
F A X 0 3 - 5 2 4 5 - 3 6 0 9

## 10. 人事公募

この度、下記の要領により、教官の公募を行いますので、広く適任者の推薦、応募を求めます。

1. 公募人員: 教授 1名
2. 所属部門: 太陽系プラズマ研究系磁気圏電波科学部門
3. 専門分野 飛翔体を用いた地球および太陽系惑星の上層大気プラズマの研究。大学共同利用機関としての本研究所の任務を十分理解し、当該分野の科学衛星プロジェクトおよびその他の共同研究計画の立案・遂行に積極的な役割をはたす方を希望します。
4. 着任時期: 決定後できるだけ早い着任を希望します。
5. 提出書類: (1) 略歴、(2) 研究歴、(3) 論文リストおよび主要論文別刷り、(4) 研究計

画書 (自薦の場合のみ)、(5) 推薦書2通 (他薦の場合)、自薦の場合には本人について意見を述べられる方2名の氏名および連絡先

6. 公募締切 平成5年2月15日 必着
7. 宛先: 宇宙科学研究所管理部庶務課人事係  
神奈川県相模原市由野台3-1-1  
電話 (代表) 0427-51-3911

問い合わせ、および資料の請求については下記に願います。

太陽系プラズマ研究系主幹 鶴田浩一郎 内線2503

8. その他  
選考は宇宙科学研究所運営協議会に於いて行います。応募者に適任者がいない場合、決定を保留する場合があります。封筒の表に「教授応募 (推薦) 書類在中」と朱書して下さい。

## 11. 京都大学超高層電波研究センター電算機共同利用申請について

京都大学超高層電波研究センターでは、宇宙科学及び超高層大気物理の分野における計算機を用いた数値実験、シミュレーション、データ解析研究をより一層発展させるため、センター内に「電算機共同利用専門委員会」を設置しております。この「電算機共同利用専門委員会」では年に1回、関連する研究者の方々からテーマを募集し、委員会で審査の上、

認められたテーマに対し計算機使用料 (全国共同利用計算機センターに限ります) を援助させて頂いております。今年度も平成5年度分のテーマを12月から1月下旬頃にかけて募集致します。つきましては従来よりこの共同利用に応募しておられない方で今回申請を希望される方は、次頁の宛先まで申請書をご請求下さいませようお知らせいたします。センター長 松本 紘



京都大学超高層電波研究センター電算機共同利用申請宛  
〒611京都府宇治市五ヶ庄 京都大学超高層電波研究センター事務室  
TEL (0774) 32-3111 内線 3330 or 3340 FAX (0774) 31-8463

## 12. 第24回国際電波科学連合 (URSI) 総会の御案内

標記の会合が下記のように開催されます。皆様、ふるってご参加ください。

期日： 1993年8月25日(水)～9月2日(木)

会場： 国立京都国際会館(〒606 京都市左京区室池)

論文アブストラクト締切： 1993年1月15日

(詳細はアナウンスメントをご覧ください。)

主催：日本学術会議、電子情報通信学会

後援：文部省\*、郵政省、科学技術庁\*、地球電磁気・地球惑星圏学会、テレビジョン学会、電気学会、

日本天文学会、日本リモートセンシング学会、電気電子情報学術振興財団(\*：予定)

問い合わせ先(アナウンスメント講求先)：

丸橋克英 URSI 京都総会広報委員長

〒184東京都小金井市貫井北町4-2-1

郵政省通信総合研究所

電話 (0423)27-7529 FAX (0423)27-6677

国際学術交流事業補助金により1992年度AGU秋の学会に出席された河野会員、横山会員の報告は次の会報(第139号)に掲載いたします。

地球電磁気・地球惑星圏学会(第16期会長・総務・庶務の任期は1993年1月中旬まで)	
会長 西田篤弘	〒229 神奈川県相模原市由野台3-1-1宇宙科学研究所 0427-51-3911 FAX 0427-59-4236
総務 町田忍	〒606京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部地球物理学教室 075-753-3952
庶務 寺沢敏夫・林幹治	
	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部地球惑星物理学科 03-3815-8020(直) FAX 03-3818-0745
運営委員会(新住所) 〒113東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21(財)日本学会事務センター 気付	
03-5814-5810	会員業務(入退会、住所変更等、会費、会誌)
03-5814-5801	学会業務(庶務、窓口、渉外)
03-5814-5820	FAX

入会申し込み、国際学術交流事業への応募は運営委員会宛、田中館賞推薦は会長宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿、お待ちしております。